

DHARMA EYE



法眼



ご挨拶

教化部長 釜田隆文
曹洞宗宗務庁

『法眼』をご購読の皆様におかれましては、ますますご清祥の御事と拝察申し上げます。日頃から格段のご法愛をたまわりますこと、改めて御礼申し上げます。

この度、昨年10月22日付にて宮下陽祐前教化部長の後任を拝命いたしました。浅学菲才の私にとりましては、まことに身に余る光栄でございます。今更申し上げるべくもないことではありますが、布教教化は宗門の今後を、そして未来を担う大切な要である、との思いを新たに過ごす日々が続いております。

私事ではございますが、一昨年(2009)の10月、アメリカ合衆国サンフランシスコ市にある、日米山桑港寺開創75周年記念法要に随喜させていただく機会がございました。数多くの随喜衆、メンバーの皆様方の参列の中、ぴんと張り詰めた、あの独特の雰囲気の中で肅々と進められた首座法戦式においては、一問一問、首座和尚さまの「万歳」という声とともに凜として振り下ろされた竹篋が地に着く、その響きを聞くごとに、それまでには経験した事がなかったような不思議な感覚が湧いてくるのを実感いたしました。

今にして思えばあの感覚こそ、釈尊が蒔かれた仏の種が、2500年以上という長い年月をかけ、幾世代も咲き代わり咲き代わりして、インドから中国へ、中国から日本、道元禪師、瑩山禪師から幾代の祖師方を経て、北アメリカの地において育まれた仏の種が一輪の花を見事に咲き、言い換えるなら曹洞宗とその教えの拡がりを実感した瞬間であったと思います。

如何にして仏の種を「育む」のか。布教教化はその一言に尽きると言えましょう。このことは海外においても同様であり、より多くの仏の花を幾世代にもわたっても世界中に咲かせるこ

とが出来れば、これ以上の喜びはありません。そのための大きな助けとなり、一つの鍵となるのは「多言語化」であります。従来より6ヶ国語で展開している曹洞禅ネットの多言語ウェブサイト(<http://global.sotozen-net.or.jp>)内のコンテンツの更なる充実化を図り、その作業に傾注しております。曹洞宗国際センター、ハワイ国際布教総監部、北アメリカ国際布教総監部、南アメリカ国際布教総監部、ヨーロッパ国際布教総監部にそれぞれお寄せいただきました各方面よりのご意見や情報等を随時提供し、ウェブサイトに反映して参りたく、また、本誌をご高覧の皆様方からもご要望をお寄せいただけましたら幸いに存じます。曹洞宗宗典経典翻訳事業におきましては、本年度英訳版『曹洞宗行持軌範』の出版までこぎつけることができお陰様で沢山の反響や喜びの声を頂戴しております。現在も引き続き、『正法眼蔵』、『伝光録』は鋭意翻訳作業中であります。また、さらに一步を進めるべく、新たな教化資料を作成し、その充実化を図って参りたいと考えております。

本年度は、今まで海外でのみ開かれていた宗立専門僧堂を初めて日本国内、熊本県聖護寺にて開単いたしました。それまでの三度とは違い、安居者にとって困難も多かったことと思います。しかしながら自国とは違う空気、天候、習慣に自らの肌で触れ、その中で過ごす3ヶ月間は、彼らにとっては忘れ難い有意義なものとなったことであらう。このような日本と海外との相互交流、そして何よりもそれを今後も絶えず継続させていくことこそが大切な布教教化活動を展開する上での大きな力となることに違いありません。またそこには何よりも皆様のお力添え、ご協力をいただかなければ円成致しません。

言葉や文化の壁を乗り越えるのは勿論のこと、今後解決していかなければならない課題は確かに存在しておりますが、そんな時であればこそ、他を自とし、お互いがお互いを慈しむ気持ちや言葉が何よりも大切になってくるのだと思います。現管長、大本山總持寺、大道晃仙禪師の告諭に、「愛語は、人々の幸せな生活と心の安寧を願い、慈心から発せられる言葉です。この愛語の行には布施・利行・同事の行が十分に具わっていると説かれています。本年度もこの愛語を実践の柱とします。愛語は苦しいときも楽しいときも、常に相手のことを思い、人を生かし、人を仏道に導く菩薩行です。」とあります。私たちは

洋の東西を問わず、共に誓願に生きる修行者として、共に努め励み、手に手を取り合って更に一步を進めて参りましょう。

本年10月には、曹洞宗国際センターの企画として、「進一歩 ～未来を切りひらく曹洞禅～」をテーマに掲げ、「国際シンポジウム」が曹洞宗宗務庁を会場に開催されます。初めての試みではありますが、国内外の多くの方々が結集し、国際布教の記憶に残る事業となることを期待しております。

最後になりましたが、本年一年の皆様のご健康とご多幸、さらに諸縁吉祥弁道増進を祈念申し上げまして、ご挨拶といたします。



正身端坐の坐禅

中野重孝特派布教師
福島県・長楽寺住職

2010年10月22日
アメリカ合衆国カリフォルニア州
パークレー禅センター

皆さま、こんばんは。

私は、曹洞宗から派遣されてこの度初めてアメリカに参りました。ハワイまでは2度ほど教団の事で来ましたが、その先が長かったように思います。英語が思うようにまいりません。日本語でお話をさせていただくことを、何卒お許しくださいませ。

昨日、サンフランシスコに参りました。今日は午前中にグリーン・ガルチ・ファームを訪れ、お参りさせていただきました。その皆さま方とお昼を一緒に頂戴することができました。午後には好人庵禅堂をお参りさせていただきました。また、ルメー大岳総監老師のご厚意でミュア・ウッズへも行くことができまして、レッドウッドの森を散策し、たいへん身も心もすがすがしい思いであります。

私は旅をするのが好きであります。日本では巡礼という旅があります。一番有名なものは、観音霊場の巡拝であります。キリスト教でも巡礼がございます。私が是非実現したいと思

っていますのが、スペインにあります『サンティアゴ・デ・コンポステーラ』聖ヤコブの旅であります。1ヵ月歩いてサンティアゴ・デ・コンポステーラに行きたいと願っております。

日本でも1,000年以上前から観音さまのお参りが続いております。私は今住職をしています長楽寺の前に、父や祖父が生まれ育ったお寺で37年過ごしておりました。そのお寺には日本の江戸時代の終わり、安政年間に観音さまをお参りしたあと建てた石の碑があります。6代前の住職が巡礼をした証であります。『百番観世音菩薩』と表書きがしてあります。

そこで、私はこの百観音さまの巡礼をさせていただくことにしました。百とは、西国三十三番、坂東三十三番、秩父三十四番の観音霊場のことであります。一番古いのは、西国の霊場であります。数年ほどかかりましたが、百番の巡礼を終えて、満願の御札に参る参拝をどこにしたらよいかと迷いました。その時に私の法友が「中野さん、中国の『普陀山』にお参りしなさい」と言いました。800年前に道元禅師さまもお参りした場所であります。

私は一緒に巡礼をした方々とその普陀山にお参りにまいりました。普陀山には3つの大きなお寺があり、周りに100を超える塔頭がありました。その中で、中心となる『普濟寺』に参拝しました。ご住職は妙善というお名前の方丈さまで、その時93歳でお会いすることはできませんでした。

そこで、監院というお役の道生という老師さまにお会いすることができました。老師さまは、中国の文化大革命を生き抜いてこられた方でありました。文化大革命は、1970年代中国を吹き荒れた仏教排斥運動でもありました。普陀山もお寺の大半が壊されました。また、僧侶も還俗しない方は、悲しいことでしたが、殺されました。老師さまは、危険を感じられ身を隠されて生き残られた方であります。お顔は非常に穏やかで、観音さまのような目をなさっておいででした。

仏教では、お釈迦さまもそうではありますが、悲しみが深ければ深いほど慈しみの心が大きく増すのであります。道生老師さまにお会いした私は教えられました。それは縁という教えであります。

私は自分の思いで、6代前の住職が巡拝をした観音さまの霊場をお参りして、そして、この縁でここまで来た、そういう気持ちでいました。道生老師は、その私に、また一緒に随行した皆さま方にお示下さいました。

「ここに来た縁というのは、あなたたちのお力でここにおい
でになったと思われるでしょうが、それ以上の深い縁があつて

あなたたちはここにおられるのです。その縁は、200年、300年、500年、そういう縁なのであります」

私は警策で肩をたたかれた、そういう気持ちでありました。ここへ来た縁は前から決まっていたのですよ、そう教えられた言葉に感動したのであります。そう思いますと、今ここに皆さまとお会いしていることは、既に決まっていたことであります。皆さまとお会いできたことを感謝いたします。

800年前、道元禅師さまは、24歳で中国に渡られました。4年ほどの修行の後、日本に禅の教えを伝えられました。中国ではいろいろなお寺さまに出会われております。その中で、特に心に残った出会いを書物の中に残されました。

私はその出会いの中で一番印象に残っているものがあります。皆様もお聞きしていることかとは存じますが『典座教訓』の中にある出会いであります。典座教訓は、食事を司るお役目を典座と申しますが、その典座の教えを示したものであります。食事を司るのも仏道の修行であります。これが基本的な教えの立場であります。

道元禅師さまが天童山で修行されていたときのことであります。このお寺は、お師匠さまの如浄禅師さまがおられたお寺であります。暑い夏の日の出来事です。道元禅師さまが回廊を歩いていた時のことであります。仏殿の前で、老僧が椎茸を干しておりました。尋ねると典座の職にあると答えました。

「このような暑いときに、老師さま、誰かに変わっていただいたらいかがでしょうか？」

と道元禅師さまは声をかけたのであります。

その時、典座は答えました。

「これは、私が務めなければならない仕事であります。」

誰も変わるものはない。

「他は是れ吾れにあらざ」

と示されました。

それを聞いた道元禅師さまは、

「それでは、もう少し夕方になってからこの仕事をされてはどうでしょうか？」

すると、老典座は

「これは、今、務めなければならないつとめだ」と答えられました。

「更に何れの時をか待たん」

これが、その時の答えでありました。

「他は是れ吾れにあらざ」「更に何れの時をか待たん」、この言葉が、道元禅師さまには大変強く印象に残られたのであります。

した。それを典座教訓に残されたのであります。

禅の修行は、老典座が示されたように、自分の修行であります。他の人の修行ではありません。そして、今やらなければならない。「今、ここに」という生き方です。

私の師匠・父は、10年前に79歳で生涯を閉じました。大変厳しい師匠でありました。何か言う前にすぐガツーツであります。目の前がピカピカキラキラ光って痛かったです。本当に怖かったんです。その師匠がいつも私に言っていた言葉があります。「今、何が大事だ？」という言葉であります。今私の命題であります。

皆様に問います。「今、何が大事だ？」いかがでしょうか？優先順位で決めれば何が残るのでしょうか？何も残らない人はいるのでしょうか？私には、この言葉は、先ほどの言葉「他は是れ吾れにあらざ」「更に何れの時をか待たん」それを示した言葉ではないか、と今はそう考えられるようになりました。

来月の13日に、私は祖父の10年繰り越しました50回忌のお勤めをすることになっております。師匠が果たせなかった供養であります。祖父は、私が生まれる前に亡くなりました。私は周りの人たちの話と残された遺影、写真で祖父の面影を偲んでまいりました。

祖父は長楽寺の住職を14年つとめました。その内の8年は脳梗塞で倒れて、右半身が不自由になり、住持職を満足につとめることはできませんでした。その祖父に私の師匠は仕えたのであります。

当時、祖父は私どもの田舎で大学に行った2人の内の1人でした。大正2年、早稲田大学の哲学科を修了いたしました。祖父は、永平寺に修行に行きました。看病で自分の世話をしている長男、私の師匠であります。申し訳がなかったかどうかはわかりませんが、こう言いました。

「自分は大学まで出て、学問を修めた。しかし、その学問は、全て永平寺の門前に置いてきた」

と言ったのであります。その言葉を、師匠は、心に修め一生信じて修行を続けたのであります。大学も行かず勉強もできませんでした。一生、「行」、つまり、修行を続けてきた師匠の言葉であります。

私も永平寺の門前に学問を置いてきたつもりですが、離れることが今もできません。曹洞宗という私たちの宗派には、“行学一如”という言葉があります。行と学は車の両輪の如くならなければならない。これが教えるところの意味であります。学

は少しは修めたつもりですが、果たして行ができているのだろうか
と恥じ入るばかりであります。

禅の生き方はやはり行であります。その基本は坐禅であります。
道元禅師さまは、

“仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、
自己をわするるなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり”
(正法眼蔵・現成公案)
と示されております。

この自己を習う行が坐禅であります。曹洞宗の坐禅は、ひたすらに
坐りきる坐禅であります。このひたすらにということがわかりません。
坐りきってはじめてその教えが体得できるのではないのでしょうか。

ですから、私は、忸怩たる思いなのであります。只管打坐が
できているのだろうか？坐禅のすがたはお釈迦さまのすがたであります。
坐禅をしてお釈迦さまの心にかなうように自分は行ができてい
るのだろうか？と、そう思っているのであります。

お釈迦さまは、坐禅をしてお悟りを開かれたと伝えられてお
ります。このお悟りは、私は、気がついたということだと考えてお
ります。恐れ多い言い方かもしれませんが、気がついたならばそれを
続けるということではないのでしょうか。

坐禅は、朝、暁天で坐って、夜、夜坐で終わる。1日朝から晩まで
坐禅をしているのでしょうか？摂心という修行がございます。これは、
お釈迦さまが菩提樹下でお悟りを開かれた故事を尊び、そのお心
をお偲びする行持であります。お釈迦さまのような心でこの摂心
をつとめているのでしょうか？

坐禅は、基本は作法にあります。坐禅を教える言葉に次のような
言葉があります。

“かたちは心を作り、心はかたちとなる”

最初のかたちは坐禅の姿勢であります。その姿勢を行じ続けること
によって心を学びます。そして、学んだ心はかたちになる。この
“なる”はかたちを離れるという意味だと思えます。それを私なりに
受け止めると、当たり前毎日を過ごそうということではないでしょ
うか。したがって、基本は坐禅の姿勢であります。その姿勢をいつ
も心に置いて、毎日をつとめきっていく、これが坐禅の禅的な生
き方だと信じます。ですから、かたち、この坐禅のすがたが大事
なのであります。まず、足を組みます。結跏趺坐、あるいは半跏
趺坐。次に手は法界定印であります。皆さまも日常に行じられて
いるこの作法でありま

す。その次に、姿勢であります。背筋を伸ばして、あごをひいて、
口は閉じて、歯と歯をつけて、舌は裏の上の歯茎につけます。
目は真っ直ぐ見たまま、坐禅の時には3尺、90センチ手前を見
ます。

坐禅の作法は、道元禅師さまの『普勸坐禅儀』、瑩山禅師さま
の『坐禅用心記』に示されています通りであります。このお示し
の通りにかたちを調える、それがまず基本であります。その時に、
体は前にくぐまったり、後ろにそばだったり、右や左に傾いたり
してはなりません。曹洞宗ではそのすがたを『正身端坐』と申し
ます。このひたすらに坐る坐禅は正身端坐でなければならない
のです。

それができません。皆さんもどうでしょうか？坐禅をすると眠
くなります。その時どうですか？経験したことがありますか？前
には絶対倒れません。必ず、後ろにガクンってなるんですね。笑
っている方は、経験者だと思います。それから、イライラしてく
ると指がこうなります。足が痛くなってくると眉間にシワが寄
ってきます。そういうときには、警策をいただきましょう。あの
バシッという音で、目が覚めます。痛みも取れます。イライラも
無くなります。坐禅堂にいる間は、それができるのであります。

坐禅堂を離れば、誰がそれをやってくれるのでしょうか。ですから、
坐禅堂で坐禅をするのはありがたいことなのであります。何か
禅問答のようなお話でありますけれども、これは大事な心構え
であります。つまり、今、坐禅堂でバシッと叩かれて怒る人が
いるのでしょうか？坐禅をしている人は、ありがとうございました。
そして、警策をいれる人もありがとうございました。そういう姿
ではないのでしょうか。拝みあっている姿であります。それを
『仏作仏行』という言葉で言います。

坐禅というのは、自己を習う修行であります。しかし、その
坐禅を離れて、坐禅の心で日常を送っていくことも修行であり
ます。仏道というのは修行のことを申します。その修行という
のは特別なことではありません。毎日を穏やかに、当たり前
に過ごしていく生き方であります。坐禅をするとそれがよくわ
かるのではないのでしょうか。自分の心がかたちに表れてくる
のであります。それを調えるのが、坐るといふ修行なのであり
ます。示された通りにそれをつとめていく、坐禅ばかりでなく、
すべてのことにおいてつとめていく、それが禅的な生き方であ
ります。したがって、朝の坐禅、夜の夜坐は、自分の生き方を
調える最高の時間なのであります。

私は、一昨日になりますが、禅センター・オブ・ロサンゼルス

ス・仏真寺でお話をさせていただきました。坐禅というのは人間をやめた姿であります。いつもの自分は、煩惱という欲望につかりきっている私であります。坐禅をしているときは仏さまであります。つまり、手も足も動かさない、黙って坐る、その姿勢であります。手が動いてしまいます。足が動いてしまいます。そうすると、人間は何をするかわかりませんね。皆さん、私というものをわかっているのでしょうか？わからないことばかりです。

坐禅をして、静かな心を学び、その静かな世界に身と心を調べてまいりましょう。そうすると、お釈迦さまが喜んで下さいます。道元さまが喜んで下さいます。瑩山さまが喜んで下さいます。そうなりたいものだと思えます。

これからも、お互いに、この坐禅を、生き方の根本、柱において毎日を調える、その日常を送ってまいりたいと願うものであります。“他は是れ吾れにあらざる” “更に何れの時をか待たん” 今、ここに、生きる、仏道修行を、今日も、明日も変わることなくつとめてまいりましょう。それが、道元禪師さま・瑩山禪師さまの願いであります。

私は、曹洞宗の管長さまのお遣いでアメリカに来ることができました。管長さまの願いでもあります坐禅を、あなたの日常生活の基本に据えて、その生き方をこれからも続けて行って下さい。また、管長さまのおことば、それから、曹洞宗の今の教えなど、英訳にされて配布いたしましたので、必ずお目通しのほどお願い申し上げます。時間がアツという間に過ぎてまいりました。頂いたお時間がまいったようであります。

禅は、私は出会いだと思っております。毎日、朝から晩までいろいろなことに、私たちは出会っております。その出会いはすべて、それが最初であり最後である。そういう思いで毎日を過ごしているでしょうか？それを実現していこうとすれば、今日一日はかけがえのない、尊い一日になるのであります。今、私もそうですが、皆さまもそうではないでしょうか？それは、私の身体、それから心、そのバランス、調和がキチッと取れているでしょうか？このバランスがどんどん壊れて離れていく、これが現代であります。

禅は『身心一如』であります。身体と心を、いつもバランスをよく保つ日常、それを、坐禅をとおしてお互いにしっかりと調え過ぎてまいりましょう。今日はありがとうございました。

死の生活のなかの一日

ロビー海鏡

アメリカ合衆国インディアナ州三心寺 奥村正博徒弟

生といふときには、生よりほかにものなく、滅といふとき、滅のほかにものなし。かるがゆえに、生きたらばただこれ生、滅きたらばこれ滅にむかひて仕ふべし。いとふことなかれ、ねがふことなかれ。

『正法眼蔵 生死』 道元禪師（1200～1253）

午前9時。私は病院の3階にある入院患者ホスピスのユニットに入る。そこではもうすでに活動が始まっている。看護師や介護人は、患者に必要な世話をしている。愛する者のベッドのそばで一夜を明かした家族の者が目を覚まし始めている。事務の者が電話の呼び出しに応えている。医者は回診を始めている。ペットセラピーの犬は飼い主がスタッフと挨拶を交わしている間、彼らが持つ独特の喜びを周囲に発散する時が来るのを不安そうな面持ちでじっと待っている。

それは単にまた次の一日が始まったということではない。ホスピスユニットでは一日一日がどれも特別な一日なのだ。どの一日も全人生であり、どの生も、この生からの別離の時と同じくらい貴重であり計り知れない価値を持つものなのである。生は死を止めることはできない。死は生を止めることはできない。ホスピスにおいては生きている者が死につつある者の世話をする。死につつある者にとって、時は自然にゆっくりと流れる。自分の生を振り返り、感情的、宗教的な問題に取り組み、あるいは死がやってくるまでただ安らかに横たわり生の最後の息が過ぎ去るままにする。

私はフロリダ州プロワード郡にあるVITAS Innovative Hospice Care® (VITAS革新的ホスピスケア) という病院内の入院患者ホスピスユニットのチャプレン (聖職者) です。これまで8年間ホスピスチャプレンとして、あらゆる種類の信仰を持った患者、あるいは信仰を持たない患者に対して、宗教的、感情的な援助をおこなってきました。チャプレンとしての訓練を通して、患者やその家族が信仰の旅路においてどのような場所にしようと、私自身の個人的な宗教的信条を一切差し挟むことなく、彼らと直に出会うことを学んできました。得度を受けた禅の僧侶として、私自身の宗教的信条によって、そのことを行うよう力づけられています。あらゆる個人的な宗教的信条を超えて、私たちの心の中には「生死を他の人々に与え、受け取り、またともに分かち合う」という願いがあるという強い

信仰のおかげで、訓練を受けたチャプレンとしての私はこの仕事をもちこたえられています。

毎日のホスピスケアの世界においてこのような願いはどのような形で表れているのでしょうか？ チャプレンでありまた禅の僧侶として、すべてのことは私自身の人生から始まらなくてはなりません。私は真摯に自分の宗教的道を行じています。その道とは禅です。坐禅を通して精神的な空間を作り出し、あらゆる出会いが最初で最後の一回きりの出会いとなるように、握りこもうとする手を放し、いつでも自分が新鮮で準備ができていて、感情的に他の人のために働けることができるよう学び続けています。これがホスピスという分野で働くために一番大事なことです。私は宗教的な行のおかげで、自然に自分がオープンになって他の人に自分の全存在をごく当たり前、また特別の努力をすることなく与えることが可能になったと感じています。

このような別の存在に自分を明け渡すことは積極的で注意深い傾聴、うそ偽りのない関心と共感、親密な聖なる空間（他者の感じていることが守られ、それに自信を持てるようにしつつ、その人の傷つきやすさや苦しみが休息と理解を見出すことができる場）を作り出すという形となります。言葉や沈黙、見つめあい、個人的な物語、悲しみと喜び、涙と笑い、平凡な人生の瞬間とただ事ではない人生の瞬間、ときにはそれ以上のことからなる出会い、そうした物事は私たちの人生に陰影を与えます。

しかし、患者やその家族の世界と私の世界という（一方は死につつあり混乱している世界、他方は明確でリアリティにしっかりと足をつけている世界）二つの世界が別々にあるわけではありません。あるのは一つの世界であり、私はその中におり、且つその一部分をなしているのです。私が触れるすべての人やすべての物はその世界の中にあります。だから患者やその家族の苦しみは私の苦しみのです。彼らの喜びは私の喜びであり、私が彼らのためにすることは、自分のためにすることなのです。また、私が私のためにすることは彼らのためにすることでもあります。そこには何の区別もありません。こうした理解は私の宗教的な行から生まれてくるのであり、人生そのものによって確証されています。個人的な気づき、あらゆる乱雑さ、混乱、明確さと曖昧さ、そのあいだのどちらともいえない状態を伴った修行、道、現実世界への個人的な関わりは私のためばかりではありません。それはどのような状況に私がいようと（今の場合はホスピスの分野であるが）すべての人のためになるのであります。

私のいのちは他者にささげられ、彼らの生死は私にささげられます。私は禅僧として、ホスピスチャプレンとして、かつて

そうであった患者として、患者の家族的友人として、それらすべてを受け入れます。永遠の中の一瞬のあいだ、目とこころの接触の空間にこの存在だけがあります。そしてすべては瞬きする間に永遠に過ぎ去っていきます。

正午、ある患者が入院患者ユニットに受け容れられた。彼の眼には恐怖、疲労、自分の全存在についての不確かさが浮かんでいる。弱々しく消耗しきった彼のからだは物質的というよりは気体的であった。私は彼に近づき目をあわせる。私は遠慮しないで微笑みかける。彼に私たちの思いやりと歓迎の気持ちを感じてもらいたい。彼の手を取る。2人の足がしっかりと地に着くようにする。彼は目を閉じる。短い時間なすがままになっている。私は彼のいのちが消え去りつつあるのを感じる。看護師たちがやってきて仕事を始める。私は柔らかく落ち着かせるような声で彼に、「何も心配することはない、私たちがちゃんと世話をします。いかなる方法であってもあなたを傷つけるようなことはしない」、とささやきかける。「看護師たちが診断の仕事を終えたら、また来る」と彼に告げる。彼は私の眼をのぞきこむ。彼は私たちを信頼したいと思っている。それが今、彼にできることのすべてである。

死につつある人は自分自身のためだけではなく、その人の人生において関わりのある他のすべての人たちのためにも或るプロセスを始めます。死のプロセスが順調に進むためには、誰もが自分自身の居場所を見つけなければなりません。遊びの中におけるように、私たちすべてが正しい自分の役割を見つける必要があります。そうすれば声や思いやりの気持ちが自然にうそ偽りなく出てくるようになります。それには時間がかかるかもしれないし、すぐれた関わりにおいて言葉、沈黙、行いがその準備のできた心の的にびたりと当たるといようなことが突然に起きるかもしれません。私が生死のプロセスの中で自分の場所を見つける、と呼んでいるのはそういうことであります。

その患者の娘が到着した。彼女は涙ぐんでいて、不安そうに憔悴している。私たちは腰をかける。彼女は自分の父親の状態については割り切っている。心配しているのは、65年間夫婦として一緒に過ごしたあげくに夫を失うことになるもろい母親のことであった。「父は母にとって第二の皮膚のようなものなのです」と彼女は言う。彼女は自分の妹の態度に矛盾した思いを感じている。妹の態度のせいで両親が父をホスピスプログラムに入れることを決断するのが困難になってしまったからだ。

「彼女はとても自分勝手です。ここに住んでいないので何が起きているのかわからないんです。私はそれにとっても腹を立てています」私は手を握り言葉を越えた触れ合いを作りながら、身

心をあげて彼女の話に耳を傾ける。私たちは涙、言葉、思い、怒り、悲しみ、絶望が自由に流れるための、そしてやがてやってくることを処理するための親密な空間を開く。明日はない、あるのはただ今という瞬間だけである。

誰かが死につつあるとき、その人に物理的にまた情緒的に近い者は自分自身の世界がその出来事に激しく揺り動かされるように感じます。あらゆる種類の反響が死につつある人の周囲の人々の生活の中に起きます。悲しみ、恐れ、不安、孤立、怒り、罪悪感、後悔、安堵、不確かさ、否認、絶望といった情動や感情はホスピスケアの日常生活においてはごく普通のことです。何年もの間、埋もれていたか無視されていた家族内の問題や人間関係が突然表面化します。それは厄介なことであり心をかき乱すようなことです。それは疑いもなく人生の最後を生きた地獄に変えるようなものになり得ます。流転輪廻の中の流転輪廻。

禅の観点から、そしてチャプレンという専門家の観点から、私たちはどのような個々の課題をも手放して、いかなる圧力もなしに、正しい見方、正しい聞き取り、状況の正しい理解がその状況に関わる人々を援助するためにうまく働くようにします。この援助は、家族の構成員それぞれが自分の真実や痛みを表現し、自分の中にそしてもし可能なら周囲に、平安を見出すことができるコミュニケーションを促進するという形で行なわれます。時には手を握って嵐と人生が過ぎ去って行くのを感じながらただ静かに坐っているという形に関わりが起きるときもあります。

入院患者ユニットに戻ると、弱々しそうな母親が次女と一緒に到着していた。2人の間にはそれぞれの世界がある。彼女らは引き裂かれている。空気に緊張が走っているのが感じらねる患者の家族たちの誰もが語られることのない死の恐怖とともに生きている。私たちは坐る場所を見つけて、落ち着いた雰囲気でお互いに話しあい耳を傾けあう。私はもう患者は家族に面会する準備ができており、そして彼はもう亡くなりつつあることを知っている。この現実はそのそれぞれの家族の現実と直面しなければならない。彼女らは何を知っているのだろうか？何を期待しているのだろうか？それをなんとか言葉にすることができるだろうか？いま私たちになにができるか？こうしたことのすべてをそれぞれに伝え、彼女らがどのようなやり方を選ぼうとも最後には「さようなら」と言えるようにしなくてはならない（もし彼女らがそうすることを選んだとするなら）。私は慈悲に満ちた千本の腕を持ち、一つの心であらゆる必要に応えることのできる方便を備えた千手観世音菩薩に助けを求める。

禅の観点から、現実と直面することは私たちの修行の成果で

あり、また修行それ自体でもあります。それは物事が自分にとってこうあってほしいと思うのを超えてありのままを見ることを学ぶことです。私たち人間の視点からすれば、死は背を向けることのできないリアルな現実であります。死体を前にしたとき、私たちは神話や、宗教的信条などによって自分がなんらかのかたちで慰めを見出そうとします。しかし、死体はどこまでも死体であり、もう二度と私たちに向かって眼を開くことはありません。これは冷酷な真実です。こういう理解に基づき、自分の修行と信仰から、またユニットにおいて日々誰かの死を経験することで確かなものになってきたのだが、私は患者とその人が愛する人たちと一緒に、密接な関係を持ちながら死という出来事へと向かう旅路を歩むことを学びました。それがどれほど痛ましいものであったとしても、もし死に対してゆっくりとそしてやさしく接近し、生死の自然なサイクルを見守ることができれば、私たちを現実へと目覚めさせる深遠でミステリアスな智慧が存在するのです。そうすれば私たちは死ぬ準備ができるし、死ぬことへの準備ができます。

怒り、憎悪、無知といった強い否定的な感情は、何が起きているかという現実を覆い隠します。それは患者やその人が愛する人たちが死という経験を生き抜き、そのことで成長することを、不可能にとまでは言わないにしても、きわめて困難にします。チャプレンの観点から、患者の物語や状況がいかに奇妙で心を乱すようなものであっても私たちは偏った判断を控えなければなりません。この人々がその日に私たちの人生の中にやってくる以前に何が起きていたのかを知ることはないからです。どのような物語にも一つの側面以上の何かがあるのです。

それぞれの人にとって大切なことを無視することなく、しかしそれを超えてその全体性?痛みと苦しみ、死の確かさ、前進するためにそれをいかに自分の人生の中に統合していくか?を見なければなりません。私たちは泥水の下にある荒廃の核心にまでたどり着かなければならないのです。共感、親切さを通して慈悲を表し、それをすべての人に惜しむことなく分かち合わなければなりません。誤解のあるところにはどこでも苦しみがあるからです。ここではチャプレンの感情や情熱は役には立ちません。落ち着きとある種の健康な距離感によって、過去の言葉や感情をよりよく聞き取れるようになるし、状況に対して中立的な地盤を提供できるようになるのです。

患者は疲労してはいるが、まだイライラするだけの活力は持っている。それは身体的な痛みではない。看護師は言う。「彼が憩い、最後にはなりゆきにまかせることができないのは、恐れか、あるいは未解決の問題に関わる感情のせいかもしれない

い。」私はしばらく彼と2人だけにしてほしいと頼む。私は彼の眼をさがし、手をさがす。2人が接触するまでじっと黙ったままにいる。彼に「あなたは怖がっているのか？」と聞く、彼の眼は私の視線を越えて、遠い地平線に釘付けになっている。やがて衰弱したささやきを通して「はい」という返事が返ってきた。私は微笑む。私は「何を恐れているのか？」とたずねる（私はどのような仮定もあらかじめ持ちたいとは思わないからだ）、ふたたび彼の眼が遠くのほうを見る。私は「死ぬことが怖いのか？」と問う、彼の眼が私を見る。その2つの眼を通して奇妙な力をもって生命力が表に出てくる。私の心の深いところから安堵の思いが湧いてくる。簡潔にそしてゆっくりと、死ぬことを決意する必要などないこと、ものごとが起きるがままに、自然に、楽にまかせればよいこと、それはもう起きていているということを説明する。「痛みますか？」と私は聞く、彼は「いいえ」と言う。私は再び微笑む。私は彼に起こっているプロセスを信頼する。

彼は目を閉じる。何かが確かに起こっている。それは漠然としてはいるが同時に彼の顔やせ衰えたからだにはっきりと見て取ることができる。今や彼はまかせている。緊張が退き、死がやって来るまで生命力の手に委ねようとしている。家族を招いて患者ともう一度一緒にならせる時である。彼らは何かが変わったとわかるであろう。以前、緊張があったところに今は平安がある。まもなく家族たちももっと自然であるがままにまかせるだろう。

ほとんどすべての関わりにおいて、その関わりが他の人々の人生や状況に反映するという経験をします。患者が不安定で、落ち着きがなく、落ち込んでいたり怒っていたりすれば、家族もまた苦しみます。彼らを苦しめるのは、自分たちの愛する者もはやこの世からいなくなるという現実だけではありません。時には、それ以上のことがあります。もし患者が平安でないなら、家族もまた平安ではありえません。だから、チャプレンが関与して、それまでには見つけることができなかった、自分の感情的、精神的場所を患者が見出せるようにかかわっていくのです。平安が、患者の身体、心、魂に訪れ、スタッフも含めたグループ全体がこの悟りの瞬間から功德を得ます。家族が全体として、あるいは家族の誰かが生死のプロセスにおいて場所を見つけれなかった場合でも同じことが起きます。誰にとっても、あらゆる瞬間はかけがえのないものです。私たちのすべて（患者、家族、チームのメンバー）は内的にも（感情的、宗教的）、外的にも（社会的状況）生と死というこの出来事の中で自分の占める場所を見出さなければならないのです。感情的、宗教的関わりは、近いものであれ遠いものであれ、患者に結び

つく社会的関係の網に触れることになるのです。

午後7時。入院患者ユニットでは1日のリズムが何度か変わる。私たちすべてはそれにしがたって流れていく。ただ生、ただ死。それは来ることでもないし去ることでもない。消えることでもないし現われることでもない。ただあるがままにそうであるだけ。たとえ私たちがそのすべてを理解していなくとも、それはそうであるようになる。私は他のスタッフと同じように自分の勤務を終わろうとしている。しかし、人生はいろいろなあり方で続いている。私はそれぞれの瞬間にそれにすべてを任せるということを学んできた。だからユニットを去るべき時が来たら、私は次の日が来るまでにきっぱりと去る。手放すこと、生を生と見、死を死と見る、私たちすべてが通り抜けるべき自然なサイクルとして見ることを学ぶ。おそらく、ユニットで人々が私たちの周りにいるとき、彼ら感じているのは？今ここにおいてあの根本的なリアリティを見、受け入れ、生きることからくるある種の平静さ？ではないだろうか。死が来るときには、死が来る。生があるときには生がある。それ以上でもなく、それ以下でもない。

私は、人生の終わりにあたって智慧を私に授けてくれた多くの患者たち、あるいはほんの短い時間彼らの道と私の道が交差したとき、私を彼らの世界の一部として受け入れてくれた患者の家族や友人たちに対して感じている計り知れない大きな感謝の気持ちを表す言葉がありません。彼らは私の人生にじつに様々な方法で触れてくれました。この世を去った多くの人たちとともに、最後の跳躍の前に、私たちは永遠の感謝と友情の同盟を作りました。もし死後の世界があるのなら、何らかの形でどこかで、ホスピスですべての人たちのためにしている私の仕事を彼らが応援し導くという合意を私たちはしたのです。それは私の善いカルマであります。



チャプレンのナースステーション（筆者右端）

最後に、私がホスピスチャプレンとして働いてきた公的な機関のことについて述べておきます。VITAS Innovative Hospice Care® (VITAS革新的ホスピスケア) はアメリカの終末介護の分野における大手プロバイダーであります。

VITASはラテン語で「いのち」を意味します。多様な宗教的背景をもつチャプレンたちが、終末期における人々の人生とそこで必要とされることを支えるために、心と贈り物を一つにすることができる専門的な空間を提供しているのです。

サンフランシスコ禅センター のさらなる活動

ジェフリー・シュナイダー サンフランシスコ禅センター

これまで10年以上にわたり、毎週月曜の夜、サンフランシスコ禅センターの本堂において60~70人の人たちが坐禅をしているのを見かけます。からだの柔らかい人は坐蒲の上に、それほど柔らかくない人は椅子に坐って坐禅をしています。これらの多くはそれまで坐禅をまったくやっただことがないか、ほんの数分しか坐ったことがない、あるいは他の人と一緒にやっただことがない人たちであります。

この集まりはメディテーション・イン・リカバリー (MIR 回復中の瞑想) プログラムと呼ばれているもので、薬物乱用やその他さまざまな行動的障害から回復しつつある人たちのために開かれています。禅センターに来るアルコール中毒者、麻薬中毒者、その他の人たちは多くの場合、神の観念を強調することのない精神的な道を探しています。そのほぼすべての人が伝統的な12ステッププログラム (12段階からなる依存症からの回復のためのプログラム) に関わっています。MIRはそれにとって代わるために行われているわけではありません。実際のところ、禅センターのプログラムはかれらがこなしている主要な回復プログラムに対してはあくまでも付加的なものであって、それにとって代わるものではないということをファシリテーター (MIRの進行係) はしばしば強調しています。

この集まりは10年以上前に禅センターのメンバー数人が、自分たち自身が取り組んでいる回復のプログラムと禅の修行との

間にお互いに共鳴しあうものについて議論するために、月1回のミーティングを持つようになったところから始まりました。苦しみの主な原因である渴愛、誓願、懺悔、他者のために生きたいという願い…こうした事柄がどちらの道においても語られています。いわばこれら2つの道の間での異なった音階での調和と反復が、道を求めるところを目覚めさせることへの理解と認識を深めてくれました。

毎月会合を開くようになってから約1年経ったところで、もともとのグループは解散しましたが、メンバーの1人が一般向けの集まりを毎週持つことにしました。それは初回からうまく進んでいき、何度かの試行を経て次のようなやり方に落ち着きました。まず、ファシリテーターが集まった人たちに歓迎のあいさつをし、そして坐禅のやり方についての短い解説を行います (より長時間のより本格的な坐禅への参加の仕方もそのときに伝える)。その後約20分間の坐禅、それから一人一人が自己紹介をし、自分が参加して実践している12ステップのグループのことを話します (これは話したい人だけがする)。ファシリテーターが仏教と依存症から回復に関してなんらかのテーマで短い話をし、その後グループでのディスカッションを行います。最後に短い (5分程度) の坐禅と回向をして終わりとなります。

多くの人たちはもう既に何年にもわたってこのグループに参加しています。現在のファシリテーターのほとんどはこのグループの出身であります (グループの指導を手伝うための基準は少なくとも5年以上継続して回復過程にあったこと、また受戒をしていること)。このグループは半日、1日、あるいは数日のリトリートも主催しています。数年前にはもう1つのプログラム (サンガ・イン・リカバリー) が開始されました。それはクラス、ワークショップ、グループミーティング、リトリート、個々のリーダーとの面談など、1年間にわたって継続的に参加したいと望む人たちのために始められました。このグループに関わっている人たちの多くは受戒をし、さまざまな形で禅センターの活動に関わるようになりました。

サンフランシスコ市には、この月曜日の夜のグループのかつてのリーダーたちが始めた更に2つのMIRグループがあります。1つは毎週金曜日に別のお寺 (ハートフォードストリート禅センター) で開かれ、もう1つは女性だけのグループが月に1度集まっています。

仏教の教え、実践と回復のプログラムが相互に協力し合うという動きはアメリカ合衆国のさまざまな町へと広がり、それぞ

れの場所で独自に生まれています。禅センターでの集まりを世話している人たちの1人はテキサス州、ノースカロライナ州、ミズリー州、またカリフォルニアの他の町へ行き、リトリートを指導しています。もともとのグループから生まれた「仏教と回復」についてのエッセイ集は禅センターのウェブサイト(www.sfzc.org)で入手可能です。

釈尊が苦しみについて説いた慈悲深い教え—苦しみの原因とその滅—は依存症的な病に苦しんでいる人たちにとってとりわけ適切なものだと考えられます。渴愛という考えはかれらにとって抽象的な原理どころではなく、文字通り大きな苦痛を伴う現実的なものなのであります。そういうゾットするような苦しみから脱出する道を示す手伝いをする—それを菩薩の誓願と呼ぼうと12ステップと呼ぼうと—菩提心が現実に活動している具体的な事例であることは間違いありません。

禅センターの他のアウトリーチの活動

禅センターのボランティアたちは週に3回サンフランシスコの女性拘置所を訪ね、ヨガと瞑想を指導しています。刑務所や拘置所というところは極めてストレスの大きい状況であり、絶えず雑音が聞こえ、プライバシーが無く、あらゆる局面で個人の無力を感じさせられます。リラックスする能力、からだやこころを休息させる技術を学ぶことは、精神的に極度の負担をかけるような環境の中において、それ以外になんの手段もないようなかれらにとっては素晴らしい贈り物なのであります。

サン・クウェンティン刑務所では、ボランティアたちが10年以上にわたって「刑務所サンガ」をつくる手助けをしてきました。毎週数名の参禅者が収容者と共に坐禅や(仏教)クラス、法要、また1日の坐禅会をおこなっています。

禅センターは、アメリカ国内の100人以上の受刑者に対してダルマペンパル(文通友達)になったり本を提供したりしています。受刑者たちはしばしば外部の人々から見棄てられてしまうので、誰かが自分のことを気にかけてくれて便りをしてくれるということを知ることは大事なことであります。かれらは仏教徒のグループやチャプレン(施設付きの聖職者)がまったく存在しない刑務所にいることが多く、私たちがなんの費用もかけず提供することのできる書物が仏法への唯一の頼りであるような場合が度々あります。

禅センターからのボランティアは地域の一時的居住施設に住む家族にも関わる場合があります。それらの家族はグリーンガ

ルチ・ファーム(農場のある禅センター)に1日招待を受け、祝日のパーティやハロウィーンは年中行事となっています。今年は親たちのためにヨガのクラスが開催されました。

禅センターは現在、リハビリテーション施設、老人ホーム施設、若者向けにサービスを提供している組織などと、そのスタッフやクライアントのための瞑想とストレス緩和のクラスを設ける打ち合わせをしているところであります。

私たちの同性愛者ダルマグループ(Queer Dharma group)はベイエリア(サンフランシスコ周辺のこと)でかなりの人口をなしているLGBT(レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー)コミュニティに向けて援助活動を行っています。2009年に設立されたこのグループは毎月1回土曜の午後に集まり、坐禅をし、法話を聞き、ディスカッションや茶話会をおこない親交を深めています。参加者の中には長年の参禅修行者もいれば、ベイエリアの他のサンガや他の町や外国のサンガで参禅している者もいます。同性愛者ダルマグループがサンフランシスコ禅センターへの入り口になるような人たちもいます。

最近、私たちはテnderロイン(サンフランシスコのダウンタウンにある地域)にある教会とチームを組んで、資金を集め、老人ホーム施設の建物の屋上に菜園を作りました。禅センターはそのための基金を得ることができ、グリーンガルチ・ファームを通して有機農法の専門的技術を提供しました。



ルーフガーデン

グリーンガルチ・ファームはお寺であり、有機農法の農場・菜園、地球（環境）に配慮した方法で食物を育てることについて学ぶための教育的機会を提供するカンファレンスセンターでもあります。これまで何百人もの学校の子どもたちがここを訪れ、自分たちが食べるものがどこからやって来るのかを生まれて初めて目にする子どもたちもいました。有機農法家になるための実習制度もあり、ボランティアを通して様々なことを学ぶための機会がここには数多くあります。

禅センターは若い人たちにも注意を向けています。「成年になるプログラム（The Coming of Age Program）」は生涯にわたって精神的な探求と取り組みを続けるよう、子どもたちを励まし、指導し、力づけることを目指しています。このプログラムには7年生と8年生（日本の中学1、2年生）たちが集まり、仲間や先輩たちと関係を築くことで精神的なサポートをする環境を提供しています。そこで、自分たちの考えや周囲の世界をどう見ているかということについて話し合っています。9ヵ月間にわたって毎月日曜日の午前9時半から正午まで男子と女子がそれぞれ別々のグループに集まります。その集まりは、5月に行われる禅堂でのプログラムの修了式で終了します。そこでプログラム参加者たちは友人や家族の列席を受け、かれらから祝福されます。

数多くのアウトリーチ活動はボランティアプログラムを通じて実行されています。グリーンガルチの菜園で働くこと、シティセンターの台所や図書室で働くこと、タサハラ（ロス・パドレス国立森林公園内にある禅センターの修行道場）のゲスト・シーズン（毎年5月から8月まで一般の人が宿泊することができる期間）の準備を手伝うこと、このような奉仕はすべて禅修行への入門となります。またコミュニティというものが全く欠如していることがしばしばであるような文化の中において、コミュニティを作りだしていく助けにもなっています。他の人々へと援助の手を差し伸べてきた何世代にもわたる男女の手を通して、仏法僧の三宝が私たちへと受け継がれてきたのであります。暖かい手から暖かい手へとつながってきたこの系譜の中で、今度は私たち自身が次へと手渡す番であるというのは、この上なく名誉なことでもあります。

正法眼蔵坐禅箴 自由訳 空闊莫外兮 鳥飛杳杳

藤田一照

ここで「空闊」といわれているのは、天にある空のことではない。天にかかっている空は闊空ではない。ましてやあそこからここに広がっている空は闊空ではない。隠れても顕れても表も裏もないことを闊空というのである。鳥がこの空を飛ぶときは「飛空」という絶対的な一つのあり方があるばかりである。飛空というおこないがどれほどのものであるかは推し測ることは出来ない。飛空という行いは世界全体を尽くしている。尽界が飛空なのであるから。この飛がどれほど多くのことであるかは知られることはないのであるが、人間の推し測りを超えたことばで言うなら、「杳杳」と言うのである。それは洞山の言った「足の下に踏むべき糸すじほどのものもないように行ぜよ」である。空が飛び去るとき、鳥も飛び去るのである。鳥が飛び去るとき、空も飛び去るのである。このような飛び去るといふことの参究を言葉で言うなら、馬祖が言った「只在這裏（ただこのところにある）」である。これこそが兀兀地（坐禅）の箴（急所）である。（坐禅においては）どれほど多くの行程が「只在這裏」の道理をききそって告げているだろうか！

宏智禅師の『坐禅箴』はこのようなものである。さまざまの時代の名だたる禅匠のなかでも、これほどの坐禅箴はない。あちらこちらの寺にいるお粗末な連中に、もしこの『坐禅箴』のようなことを言わせようとするなら、一生二生の力を尽くしても、言うことはできない。現在、諸方の叢林にはこのような『坐禅箴』を語る人可以である人はいないのであって、ただこの宏智禅師の『坐禅箴』があるのみなのである

今はなきわが師、如浄禅師は法堂にあがっておこなう正式の説法である上堂のとき、いつも言っておられた。「宏智禅師は古仏である」と。そのほかの人をそのように言うことは決してなかった。人の真価を知ることができるまなこのあるときには仏祖でさえも見分けることができるのである。まことにわかるのである。洞山の伝統には仏祖を仏祖と知る仏祖がいるということ。

現在、宏智禅師以後八十年余りの年月が流れている。その『坐禅箴』を読んでわたしも以下のような『坐禅箴』を撰述した今は仁治三年（1242年）壬寅三月十八日である。今年から宏智禅師が入寂した紹興二十七年（1157年）十月八日にいたるまで、前後の年数を数えるとほとんど八十五年になんなん

とする。今、わたしが撰述する『坐禅箴』は次の通りである。

坐禅箴

坐禅は仏々の要機であり、祖々の機要である。

不思量(人間の入る余地がないこと)で真実が現成し、不回互(見るものと見られるものの対立がない)のまま真実が現成する

不思量で現成する真実であるから、その現成は感覚的なものではなく自己の真実と親しい(親密=一体 傍観者なし)のである

不回互で現成する真実であるから、その現成は知覚の対象にはならないが、真実の実証である

その真実の現成は自己と一体なのであるから、真実を汚すような煩惱はない

その真実の現成は真実の実証であるから、坐禅においては洞山五位で言われる正とか偏を持ち出す必要はない

染汚のない親しさは、説明も分析も一切うけつけない解脱である

正とか偏のない実証は、はからいのない真実でありそれをまっすぐに修行する努力である

水は澄んで地面が透き通って見える。魚は無限の水の中を泳いで泳ぎきることがない

空はひろびろとして透き通っている。鳥は無限の空をいくら飛んでもきりがない

宏智禅師の『坐禅箴』はそこで言われていることが十分ではないと言うのではないが、さらに掘り下げてこのように言い取るべきなのである。いやしくも仏祖の児孫であるからには、かならず坐禅を参学の一大事とすべきである。これこそが仏祖から仏祖にのみ正しく伝えられた仏としてのしるしなのである。

国際ニュース

曹洞宗宗立専門僧堂

熊本県聖護寺において、平成22年11月1日から平成23年1月25日まで開単され、16名が安居しました。

ヨーロッパ国際布教総監部主催研修会

期日：平成22年10月16・17日

会場：フランス共和国・禅道尼苑

南アメリカ国際布教総監部会議

期日：平成23年2月10日

会場：両大本山南米別院佛心寺

ハワイ管内布教師春季定例会議

期日：平成23年2月19日

会場：両大本山布哇別院正法寺



英語版写経用紙

新たな教化資料として、英語版写経用紙を作成致しました。ご希望の方は、曹洞宗宗務庁教化部国際課までお問い合わせ下さい。